

## 見所の小雀（4）

### お家元と「丹後物狂」

～ 2010年4月29日 国立能楽堂 ～

「丹後物狂」は、世阿弥が自著の中でしばしば取り上げるほど気に入った曲なのに、江戸時代頃からしばらく上演されなかったのを昨年10月復曲。舞台となった天の橋立・智恩寺文殊堂の境内で、観世宗家（観世清和）親子によって演能され、今度はその東京公演でした。

シテが家元というだけで、行く前からいつもワクワクするのですが、それに加えてこんなことも。能公演の2週間前に、能楽堂小舞台でプレ・レクチャーがあり、前列に陣取っていた私と、登場された家元と目がバッチリ。その時なんと家元は「や～あの時の…」、という目でパーっと笑顔を送って下さいました（ホント！）。あの時と言うのは、昨年私の演能前に、家元と10分ばかり打ち解けた会話をすることが出来、きっと見覚えのある顔と思われのでは？と、勝手ながら推察し胸が破裂しそうにドキドキしました（とっても嬉しい私なのです）。

「丹後物狂」の粗筋は、智恩寺近くの領主岩井殿（シテ）は願をかけて授かった子・花松（子方・三郎太）を、お寺に預けて勉学に励ませていました。花松（14・15歳）が里帰りして、まじめに勉学をしていることを報告している最中、側にいた下人（アイ・山本東次郎）が、『ささら八撥（やつぱち）』という雑芸も上手だと口をはさんだので、息子に期待を持っていた領主は、二日酔いも手伝って激怒、即座に花松を勘当します。悲しんだ花松は海に身投げしてしまいますが、幸い船頭に助けられ、九州・彦山の寺で学問に励んで大成。説教僧としてワキ（福王和幸）を伴い、故郷の文殊堂で説法を始めます。かたや子を失った後悔から故郷を離れ、夫婦でさすらい物狂いとなった父親。幾歳月を経て、再び文殊堂に戻ってみると、説法があるというので聞きにいくと、親子と分かり対面が叶ったというお話です。

この能は子方の年齢から、本当の親子が演じられるのは、限られた時期だけですから見逃せませんが、その上、目を瞠るのは子方・三郎太君（10歳）の堂々としてあっぱれな演者ぶりです。増田正造さんによれば（「観世」より）、智恩寺公演の時には、子方の顔に虻がとまったのを払いもせず、泰然自若だったよし（映画の宮本武蔵のよう）。また、この歳頃特有の高いボーイソプラノで思い切り良く”説法“を謡うと、シテの声が、いつもより甘く深く聞こえて、シテの引き立て役としての任も大したものだと感心してしまいました。

登場人物は全員が直面。（顔に表情を作らず、ほとんど瞬きをしないのも難しそう～と、私は目をパチクリ）シテの詞も多く、ドラマ性があり、見せ場も沢山ありました。例えば身投げした我が子を、欄干を握りしめ覗き込んだり、自分も入水しようと階（きざはし）に、足を一步踏み降ろすという珍しい所作も面白かった。特に花松の残した『ささら八撥』を持って舞う、リズムカルで切れ味の良い「鞆鼓」はとても楽しいものでした。

総じて、家元は本当に美しかった！片手で何でもなく扇を広げる時とか、一つ一つが洗練され、磨かれた、動きの積み重ねが集大成して、このような素晴らしい能になるのでしょうか。それは子供の頃から、まさに三郎太君のように、修練を重ねられたきたからだ、伝統芸能を継いでいく様子を目の当りに見る感じがしました。

世阿弥は、最初、両親が登場するのを父親だけに書き改めてから、この曲はヒットしたそうです。今の世間でも父と息子、特に自立をめざす時期の息子との関係や葛藤は、永遠のホームドラマのテーマだと思えます。思い起こせば、我が家でもハラハラするような出来事はいくつかありました。しかし、今回は物語とは裏腹に、親子で共演する素晴らしさや、成し遂げる喜びが伝わってくるようで、その姿に、じわっと目頭が熱くなりました。（尾崎記）